

14ヶ国語における慣用句の調査

— 東洋と西洋の慣用句に見られる発展の傾向 —

キロワ・スベトラ

1. はじめに

言葉を学ぶことにより違う国の世界に触れることができる。特に慣用句を学ぶと、その国の文化が身近になってくる。

慣用句というのは、簡潔に言えば：二つ以上の単語から成り立つもので、全体として、ある特別な意味を表すものである。

本調査は14ヶ国語において、10項目の慣用句を各言語で調べたものである。実際に其々の言語を母語とする者に質問し、確認しているので、これらの表現が現在も使用されていることは確かである。

2. 調査に取り上げた慣用句

日本語とブルガリア語の慣用句の相違は東洋と西洋の相違を表現すると想定して、その確認を得るためにこの調査を行った。

1. 「頭からつま先まで」

全身を表わすこの慣用句は多くの言語で出発点は頭だが、スペイン語とベトナム語でそれは足である。大昔、獣や困難から逃避することを考えて、足が一番重要な身体部位であった。しかし、社会の発展と人間の進出により頭が体の中で一番重視されてきている。以上のようなことを念頭において、スペイン語とベトナム語の慣用句が一番早く生まれたと想定する。

一番上の身体部位はどの言語でも頭である。しかし、下の部位には様々な語がある：つま先、踵、足首、足、足の底。日本語、英語、韓国語ではつま先を使用しており、人間が寝ている様子から生まれた表現である。それに対して、ブルガ

リア語、タイ語、ドイツ語、トルコ語では「足から踵まで」と言っており、人間が立っているときに身長を測るときの様子である。ギリシア語の場合には足首を使用し、体を正面から見たとらえ方である。

2. 「海老で鯛を釣る」

この慣用句は東洋で生まれた表現だと言える。西洋ではブルガリア語以外に対応するものがない。全ての慣用句は二つのグループに分けられる—商業的考え方（韓国語、モンゴル語、中国語）と漁業的考え方（日本語、タイ語、ベトナム語、ブルガリア語、トルコ語）である。

3. 「首が飛ぶ」

この慣用句から分かるように、東洋と西洋とでは命を表わす身体部位には異なる傾向があると言える。東洋ではそれは首で、西洋では頭である。中世、フランスでは死刑としてギロチンが発明され、その影響が西洋の表現に見られる。東洋の表現では、刀を使って、命をとることが基になっているので、頭ではなく、首になった。現在、この表現は元の意味から離れて、比喩的に使用されている。

4. 「出鼻を挫かれる」

この表現にも東洋と西洋とでははっきりした傾向が見られる。西洋では翼は神性の印、意志、創造力の象徴である。反対の表現「翼を与えられた」という慣用句は自信、力、励ましの言葉などをもらったときに使用される。また、「翼が生えてきた」という表現は強い意志を持って、精神的に強い人のために使用される。それは自信、力、勢力に満ちているという表現である。

それに対して、東洋では前進することは体の中で鼻で表現されている。鼻は感覚器官として重視されている。

5. 「虎の尾を踏む」

この表現には全ての言語にかなりの差異、豊かさが見える。一定した傾向ではないが、東洋では虎が多く使用されているのに対して、西洋ではライオンである。それは動物の大帝についての考え方が異なると言える。

6. 「七転び八起き」

西洋の表現は説明的であると言える。勤勉の重要性が強調されている。東洋の表現は数字を使ったり、比喩を使ったりしている。

7. 「猫の手も借りたい」

忙しいという意味の慣用句にもかなりの差異が見られる。西ヨーロッパ言語（ドイツ語、スペイン語）では忙しさは頭で表現されているが、東ヨーロッパ言語（ブルガリア語、ギリシア語）では命で表わされている。東洋では目、鼻、手、息、顔が使用されていて、一定した傾向がないと言える。

8. 「膝を打つ」

この表現では西洋と東洋とでははっきりした相違が見られる。西洋では何かを思い出したときに脳を納めた身体部位一頭を叩くという表現である。逆に、東洋では正座の習慣を基に「膝を打つ」という表現になった。

9. 「目がない」

殆どの言語で好きだということは大切なことを無くすと連想されている。ブルガリア人、ギリシア人、トルコ人、スペイン人、ドイツ人にとって、それは脳である。判断もできないほど好きである。日本語とベトナム語の表現は同様に外見に関わっている。モンゴル語は一番極端で、命を失うほど好きとあって、意味が強調されている。

10. 「目から鱗が落ちる」

中国語と英語以外の全ての表現に目が共通している。視力の重要な機関として、目のおかげで人生の中の全てのことに對して正しい見方をすることができる。日本語と西洋では目は何かに妨げられるという傾向がある。ギリシアは紀元前6世紀に古代劇場が生まれた国で、そこでマスクが重要な役割を果たしていたことが慣用句に影響を及ぼしている。聖書ではカーテンは象徴的な意味がある。キリストの真実を理解することを妨げるものである。その後この表現は人生の中の真実に関わるようになった。

3. まとめ

東洋と西洋の慣用句の分析を明確にするために東洋と西洋の言語の類似と相違に注目したい。

「頭からつま先まで」という慣用句は東洋と西洋で全体性を同様に体の端にあ

る身体部位で表わす唯一の類似性が高い表現である。その慣用句の全ての言語で体の一番上に位置する身体部位は頭である。下の身体部位の相違（つま先、踵、足首、足の底）を重要でない物として無視し、次のようなことが言える。人間にとって体は全体性を表す一番ふさわしいメタファーである。残りの9つの表現には相違が増えている。

西洋の言語では普通二様の類似がある。それは行動を表わすときと対象（または主語）を表わすときである。それに対して、東洋の言語では二様の相違がある。それぞれの国の慣用句には上記の両方の言葉が異なる。

「目がない」という慣用句はその著しい例である。西洋の人にとっては何かを大好きになったときは理性の象徴である脳、頭を無くすことで表わす。行動の類似—「無くす」と対象の類似が見られる。それに対して、東洋の慣用句は新鮮な考えと想像力に満ちている。身体部位の相違（目、心、手、脈、人生）と行動の相違（離れる、無くす、踊れないなど）がある。

「虎の尾を踏む」という慣用句は東洋の言語において珍しく意見の一致が見られる。それは虎を力のある、強い動物とする考え方である。西洋の国にとってそれはライオンである。

西洋の言語では「勤勉は人間を美しくする」ということわざで勤勉は二つのことをもたらす—神様の手伝いとプラスイメージ。東洋ではまた二様の相違がある。例えば、転ぶことと起きることで表現されている。あくまでも諦めないことが強調されたり、また戦うと勝てる確信（苦味のあとに甘味がくる）が表わされている。

西洋では命を無くすこと、仕事を無くすことは「頭が飛ぶ」という慣用句で表現されている。東洋では頭より重要とされる首が使用されている。中国語ではそれは特殊な表現になる—「イカを炒める」。

僅かな労力や品物で、大きな利益を得ることはブルガリアで小さい動物で大きな動物を捕まえることで表わされる。その対立する動物は蠅と象である。東洋ではまた相違が見られる：モンゴル人にとってそれは子馬を無くして、大きい馬をもらうことである。日本語で小さい魚で大きい魚を釣ること、韓国語では少量のお米をたくさんのお米と交換すること、中国語では価値のない物をあげて、価値

のあるものをもらうことである。

何かを思い出すために西洋人は頭を打つという。それは頭には考える器官である脳が収められているからである。しかし、日本、中国、ベトナムでは正座の習慣を基に作られた表現である。タイと中国の慣用句は西洋の表現に同様である。

西洋では将来への希望、計画を表現するときに、どの国でも一律な考え方がある。希望は翼で表現されていて、計画が思っていた通りには行かない場合には「翼を切られる」、「翼が壊れる」などで表わす。東洋ではこの象徴は翼ではなくて、鼻である。

二つの大陸—アジアとヨーロッパの類似と相違を研究するときに興味深い傾向が見られる。西洋の国々の象徴と考え方が共通していることと東洋の表現には共通している象徴がないという最初の考察は必ずしもそうではないことが明らかになった。日本、韓国、ベトナムの考え方に共通の傾向が見られる例がある（膝を打つ、鼻を挫かれる、目から鱗が落ちる）。大陸に位置するモンゴルと中国は普通自分の独特の考え方がある、他のアジアの国々の表現とは異なる。

西洋人にとっては今までに誤った考え方をしてきたことが分かり、急に真実が明らかになることは目を妨げていた物が落ちることで表現されている。東洋の言語でも同様な言い方で、妨げるものだけが異なる—鱗、カーテン、マスク、眼帯。東洋と西洋の殆ど全ての国々では目が真実を悟る器官であるという考え方があるが、中国だけは特殊な言い方がある。それは歩んでいる道が綺麗になると真実を悟ることができるというメタファーである。

「猫の手も借りたい」という慣用句は西洋では死ぬために時間がないとか頭を上げることができないなどが使われている。東洋では実際にあまり手伝ってくれない猫の手も借りたい（日本語）、または沢山の手を持つシヴァ神様への崇拝（タイ語—沢山の手が欲しい）である。

ベトナムと中国の表現では特殊な言い方がある。ベトナム語ではそれはちょっとしたこともできないほど（帽子を拾うこともできない）の忙しさで、中国語ではそれは生きるために重要な呼吸をすることもできないほどの忙しさである。

結論：14ヶ国語における慣用句の調査は今までの研究の視野を更に広げた。予想していたことが立証されて、また、新たに見直すべき点もあった。具体的に次のようである：

題目に関する特徴：西洋各国の慣用句では繋がりや度合いがとて強い。共通している表現が多く、象徴やアイデアの使用には類似点がたくさんある。より国際的な表現に見えて、予想できる慣用句が多い。東洋の慣用句に較べると多様性に乏しい。東洋の慣用句はもっと新鮮で、共通度が低い。それぞれの国の文化をはっきり伝える表現だと言える。(例：9.「目がない」)

慣用句の発生に影響した主要因：東洋各国の慣用句の発生に影響を及ぼしたのは主に国内主要因だと言える。それは文化、伝統や生活様式などである。それに対して、西洋では国外主要因が一番強かった。地理的な特徴、歴史的な出来事の影響、活発に行われるコミュニケーションなどが挙げられる。

参考文献：

[辞書]

1. 尾上兼英監修、1993『成語林』。旺文社
2. 北村孝一、1987『世界ことわざ辞典』。東京堂出版
3. キロワ スベトラ、2002『日本語ブルガリア語の慣用句ことわざ辞典』。シリウス4
4. 時田昌瑞、2000『岩波ことわざ辞典』。岩波書店
5. 1981.『ブルガリア語辞典』。Bulgarian Academy of Science

[著書・論文]

1. 国広哲弥、1985「慣用句論」、『日本語学』1月号、明治書院
2. 小池清治、2002「身体部位和語名詞を中心とした慣用句一覧」、『日本語表現。文型辞典』朝倉書店、2002年10月
3. 小池清治；スベトラ・キロワ、2003「慣用句の分類とその応用」、『宇都宮大学国際学部研究論集』第16号 抜刷
4. 秦恒平、1984『からだことばの本』。筑摩書房
5. 宮地裕、1985「慣用句の周辺」、『日本語学』1月号、明治書院

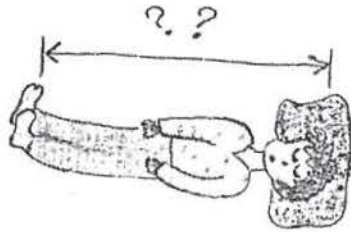
(キロワ スベトラ 日本語学)

資料1-1

No.	言語							
	日本語	ブルガリア語	英語	ギリシア語	スペイン語	ドイツ語	フランス語	ロシア語
1.	頭から つま先まで	頭から 踵まで	頭から つま先まで	頭から 足首まで	足から 頭まで	頭から 踵まで	頭から 足まで	頭から 足まで
2.	海老で 鯛を釣る	蠅で 象を釣る						
3.	首が飛ぶ	頭が飛ぶ	斧をもらう	頭が落ちる		頭が飛ぶ		肩から頭を
4.	出鼻を 挫かれる	翼を切られる	翼を切られる	翼を切られる	翼を切られる	翼を切られる	誰かの翼を かじる	翼を切られる
5.	虎の尾を 踏む	ライオンの 尾を踏む	寝た巨人を 起こす	尾を踏む				寝た獣を 起こす
6.	七転び 八起き	勤勉は人間を 美しくする	最初成功しなけ れば、またまた やってみること	勤勉な人には 神様も手伝っ てくれる	勤勉は一番の 美徳である	勤勉でなけれ ば、成功でき ない		勤勉は人間を 美しくする
7.	猫の手も 借りたい	死ぬための 時間もない	息をする時間 がない	死ぬための 時間もない		頭を上げるこ ともできない	どこで最初に頭 を出せばいいか 分からない	回転梯子に いるリスのよう
8.	膝を打つ	頭を打つ	頭を打つ	頭を打つ	頭を打つ			頭を打つ
9.	目がない	脳を無くす	気が狂う	脳を無くす	脳を無くす	脳を無くす	頭を無くす	頭を無くす
10.	目から 鱗が落ちる	目から カーテンが 落ちる	つかまえた	目から マスクが 落ちる		目から 眼帯が 落ちる		ピンクの眼鏡を 外す

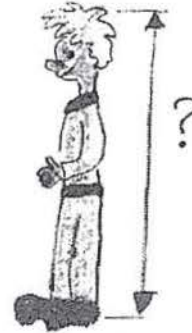
言語 No.	日本語	ブルガリア語	韓国語	タイ語	中国語	トルコ語	ベトナム語	モンゴル語
1.	頭から つま先まで	頭から 踵まで	頭から つま先まで	頭から 踵まで	頭から 足まで	頭から 踵まで	足から 頭まで	頭のとっぺんか ら足の底まで
2.	海老で 鯛を釣る	蠅で 象を釣る	一合升を挙げて、 一袋をもらう	コオロギで 象を釣る	レンガを挙げて、 玉石をもらう	一つの鉄砲玉 で二兎	小さい魚で 大きい魚を釣る	子馬を無くして、 大きい馬をもら う
3.	首が飛ぶ	頭が飛ぶ	首が切られる	首が飛ぶ	イカを炒める			
4.	出鼻を 挫かれる	翼を切られる	鼻筋を折る		壁にぶつかる	翼が壊れた	鼻を妨げられる	頭を押さえる
5.	虎の尾を 踏む	ライオンの 尾を踏む	寝ているライオ ンの鼻ひげを触 るな	虎・ライオ ンの尾を踏 む	虎の頭 にかゆみを 引っ掻く		虎のひげを 撫でる勇気 がある	虎の尾を踏む
6.	七転び 八起き	勤勉は人間を 美しくする	七転び 八起き		苦味が終わって、 甘味が出てくる	勤勉は人間の 鏡である		土の中に埋めて も、また出てく る
7.	猫の手も 借りたい	死ぬための 時間もない	目も鼻も開ける 暇がない	たくさんの 手が欲しい	息が止まるほど 忙しい		顔が暗くなるほ ど忙しい	帽子を拾う 暇がない
8.	膝を打つ	頭を打つ	膝を打つ	頭を打つ	頭を打つ	脳を無くす	膝を打つ	
9.	目がない	脳を無くす	脈も踊れない		手を離せないほ ど好き		目がないほど 好き	命も要らない ほど好き
10.	目から 鱗が落ちる	目から カーテンが 落ちる	目が広がる		茅に覆われて、 塞がれていた道 が突然に開かれ る		目が明るくなる	眠りから目が 覚めたようだ

日本語



頭からつま先まで

ブルガリア語



頭から踵まで
ot glava do peti
от глава до пету

ギリシア語



頭から足首まで
Ap to kefali os tis ftérnes
Απ' το κεφάλι ως τις
φτέρνες

タイ語



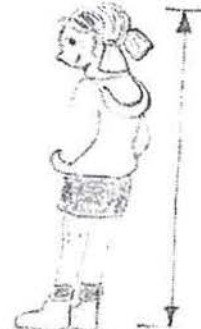
頭から踵まで
suan sung su-an su-ang
สูงส่ง

ロシア語



頭から足まで
s golovni do nog
с головы до ног

ドイツ語



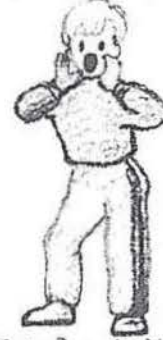
頭から踵まで
Fom Kopf bis zum Fus
Vom Kopf bis zum Fuß

英語



頭からつま先まで
From your head to your toes

韓国語



頭からつま先まで
머리부터 발끝까지
mŭributŭ bal kkauc kkaji

中国語



頭から足まで
shóng tóu dào jiǎo
从头到脚

ベトナム語



足から頭まで
Tu chân đến đầu
Tu chân đến đầu

トルコ語



頭から足まで
Bastan ayağa kadar
Bastan ayağa kadar

フランス語



頭から足まで
Diu lia tet opie
De la tête aux pieds



死ぬための時間もない
 Den ého keró úte no petáno
 Δεν έχω καιρό ούτε να πεθάνω

たくさんの手が谷欠しい
 mee-par-mer
 มีพมามี



ドイツ語

回転はしごにいろりすのよう
 kak belka v kolese
 как белка в колесе





息をする時間がない
I don't have time
to breathe

韓国語



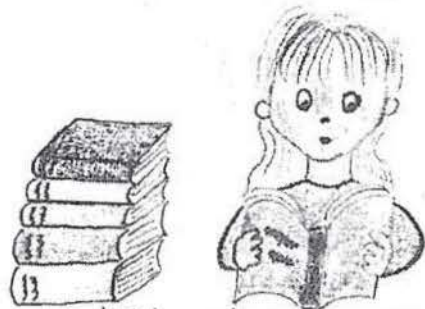
目も鼻も開ける暇がない
Nunkottülsea öbpdä
눈코 뜰새 없다

中国語



息が止まるほど忙しい
mang de chuan bu guo qi
忙得喘不过气

ベトナム語



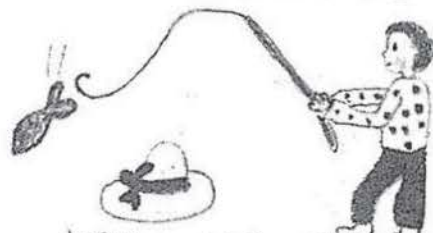
顔が暗くなるほど忙しい
Bân tõi mät
bân tõi mat

フランス語



どこで最初に頭を出せばいいかわからない
Ne plus savoir où donner de la
tête

モンゴル語



帽子を拾う暇がない
onsär malgar gan abäh zab
wüqi

Handwritten signature or note at the bottom right of the page.